

日本キリスト召団有志春季特別集会(2)(京都)

福音の奥義

——ヨハネ伝第16章7節、17章1～23節——

1992年5月17日

小池辰雄

キリストに常燃の火とされ生きる 我(キリスト)に居れ 詩「主さまあなたは」 無限無量性
「主さま!アーメン!」 奥義の中心は根源愛 十字架と霊現 弥陀の誓願不思議に 詩「みめ
美しく」 『ドイツ神学』 十字架の聖ヨハネの『暗夜』 大祭司の祈 感話懇親会

【ヨハネ】

「7けれども私は本当のことをきみたちに告げる。私が去るのはきみたちに益である。私が去らないと助主はきみたちに来ない。私が往つたら、これをきみたちに遣わす。」(ヨハネ16・7私訳)

「イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う「父よ、時来れり、……

11我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守り給え。これ我等の如く、彼らの一つとならんためなり。……

18汝我を世に遣わし給いし如く、我も彼らを世に遣わせり。……

21父よ、汝我に在し、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。

22我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり。これ我らの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。23即ち我彼らに居り、汝我に在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり。」(ヨハネ17・1～23)

●キリストに常燃の火とされて生きる

召団は幾つあつても、また、幾つになつても、問題じゃない。要するに、キリストに本当に常燃の火とされて生きているか。それだけです。

平櫛田中という彫刻家がいる。108歳で仆れたかな。その人の文字が、暖簾になつて、私の書斎にかかっている。

「いまやらねばいつできる。わしがやらねばたれがやる」

そういう言葉です。私は朝起きると、真正面にその字がかけてある。

その横に、ベートーベンの顔の額が懸けてある。このベートーベンの額は、私が大学の時に神田の額屋さんで——これが真正面にかかっていた。



「いや凄いな、これが本当のベートーベンだなあ」

と。にらみつけているような顔です。ドイツの作品なんです——「あれ、ください」と、それを買った。その大学時代から今日にいたるまで、私の死ぬまで、ベートーベンを私をジッと凄い顔で見えています。

ベートーベン「第二の我」がいなかった。ということは、遂に恋人もつかまえることもできず、結婚もしそこなった。自殺しようと思っただけでも、思いとどまった。それで、ベートーベン「ハイリゲンシュタットのテストAMENT」といって、その遺言状が残っている——

「これから世のかわいそうな人たちのために作曲する」

と。それからの作曲が凄い。『第九』まで書いて、第十を考えていたけれども、第十は遂に書かないで死んでしまった。彼が死ぬ時に、

「友らよ、喜べ。喜劇は終わった」

と言った。悲劇を生き抜いた人が、「喜劇は終わった」という。ダンテがそうです。故郷から追い出されて、流浪の旅十九年。流浪の旅である『神曲』を書いた。大変なものだ。本当に生きたということは、そういうことです。

とにかく、今が、今日が即ち永遠である。「永遠の今」という言葉があるとおり。それに、過去をも未来をも、この現在において集約してしまう。過去のプラスもマイナスも全部、私はキリストにあつては、全部これを光に変えてしまう。それから、最後の日も、新天新地も。キリスト自身が福音書で、新天新地を実現しながら、体現しながら歩いておられた。黙示録の世界はキリストが既に現している。イザヤ書35章を。大変な霊止^{ひと}です。このキリストを抜きにして、どこに行くか。福音書は何といつても凄い。

今日は、私は標題に『福音の奥義』と書きましたが、「奥義」は「ミステリオン」という言葉ですが、英語でいうと「ミステリー」です。神秘の世界。これの一番いい注解は、助言は実は、親鸞の『歎異抄』なんです。あれは仏道の奥義を語っている。親鸞の歎異抄は弥陀の本願の効力によって動いている。

●我（キリスト）に居れ 讃美歌に、

「神の恵はいと高し、…いと深し、…いと広し」

とある。その高いことは、絶したような高さ。深いことは、深淵よりも深い。広いことは、一切を包んでしまう。神の「恵」は「愛」と同じことです。

我々にとっては、キリスト抜きにしては、「神」なんて言っただってダメなんだ。キリストから離れたら、皆おかしくなる。ヨハネ伝15章に、

「我に居れ」



という。

「私の中に宿れ。私をお宿にしる」

と、あの「居る」「メネイン」という字はそういう字です。キリストの言は本当はギリシア語ではない、ヘブライ語だ。神の根源語と私はしよつちゅう言っている。ギリシア語でもヘブライ語でもない。神の根源語、その響きです。

「私から離れたら何もできない」

と、キリストは言っておられる。

「できているようだが、ダメだ」

と。キリストは父から離れたら何もできないひとです。

「我、何事もなしあたわず。神さまにさせられている。私は何も教えているのではない。神さまに言わせられている」

と。だから、私は、キリストは何にも無い人だから、

「無者」

だという。世界中で、キリストのことを「無者」と言っているのが、他にあるかないか知りませんけれども。これが、即、無限無量の世界なんです。神さまがキリストの中に入ってきてしまった。自分がなにもないと、神さまが入って来たものだから、

「我を見し者は父を見しなり」

と。そんなことが、はつきり言える靈止ひとが他にいないんです。キリスト教、教訓ではない。キリストなんだ。

言葉というものは、表現すると、ズレてしまう。だから、

「沈黙は金なり」

というのは、

「もう表現しきれませんから、黙らざるを得ません。しかしながら、胸の中はもういっぱいです」

と。そういう沈黙でないと。沈黙の雄叫びということを私は言います。

「叫んでも叫びきれない。最後は黙って叫びます」

と。そこは、深処ふかみの世界なんです。

「今のキリスト教は浅くなってしまった、深みが欠けてしまった」

と。これはティリツヒ（パウル・ティリツヒ）というこのあいだ死んだ神学者の言葉です。有名な宗教哲学者です。

「現代は深みがなくなった世界だ」

と。本当のどん底の世界、それがまた最高の世界なんです。深淵には星が宿る。それで、

「私に居なさい。私につながっている。私とつながっていれば、何でもできる」
と。だから、



「我に居らば、何事をも願え。必ず成る」

とちゃんと約束しておられる。キリストは自分の父なる神との体験を全部、告白している。教えているのではない。だから私は、

「山上の大告白」

だと言っている。教えるなんていう意識はダメだ。私は教師という言葉は嫌いだ。死にいたるまで学徒です、学んでいる。

奥義、ミステリオンのはじめはキリスト自身なんです。それを本当に身体に受けて展開していったのが使徒パウロです。パウロを抜きにしたら、新約聖書は成り立たない。それくらい、キリストの証し人です。アッシジのフランシスも素晴らしい証し人だ。賀川豊彦も。ミステリオンの世界は「神—キリスト—我」、このつらなり、縦の関係が本当に立っている世界、これが奥義の世界です。その連なりはもちろん、キリストの霊です。聖霊もキリストの霊と言った方がいいくらいです。キリストによらない霊は危ない。

●詩「主さまあなたは」

召団讃歌のA49番「主さまあなたは」の歌詞に、

召団讃歌A49「主さまあなたは」

(1988年8月3日作 讃美歌48「しずけきゆうべの」の曲で)

1 十字架・聖霊の みたま 主さまあなたは

我れを救ひて 戦はせ給ふ

2 主さま あなたはわが御光よ！

我れをつらぬき かがやきたまへ

3 主さま あなたはわが肉の霊肉 にく

あなたを喰ひ くら 永遠にぞ生きん とわ

4 主さま あなたはわが骨の霊骨 ほね

わが脊椎に み 聖手 みて 按きたまへ

アダムがエバに、「わが肉の肉、骨の骨」と言ったが、私たち一人びとりにとっては、キリストは「わが骨の骨、肉の肉」です。

5 主さま あなたはわが血の血なり

天の生命を いのち ひとにわかたん

6 主さま あなたは愛の愛なり

この愛をもて ひとを助けん

7 主さま あなたは歌の詩歌なり うた

生涯の限り いのち 聖名を讃へん！ みな

8 主さま あなたはわが身のすべて



あなたと一如 アーメン ハレルヤ

ひとを助けざるを得ない。全部、ざるを得ない世界です。キリストによらざるを得ない。

「この同胞のためには、たとえキリストに捨てられても、我は……」

といって、あの「アナテマ魂」というのは、パウロがロマ書9章で言っている。

「自分には憂いが一つある。さんざんキリストに逆らっていた私がキリストにとつ捕まってしまったが、ユダヤ人は、お前たちはダメだ。お前たちの救いのためには、私はキリストに捨てられてもいいんだ」

と、あのパウロの気合です。そのユダヤ人が相変わらずユダヤ教でもつてとどまっていた、

「パウロは間違った」

と言っている。何をぬかすかと。

だから、私は「お父さま」と祈れないんです、「主さま」としか。「お父さま」でもいいですよ。「お父さま」でも「主さま」でも「御霊さま」でも、これは本当は離することができない、一体である。三位一体とは神学でも何でもない。本当なんだ。研究だの討議だのと、そんなことでもつて本当にその世界に入れるか。冗談言うなど。

「召団なんか、どうなつたつていいよ」

と、そういう気持の人が本当の召団員だ。我々はいかなる言葉も表現のできない驚くべき現実を持っています。そうでなかったならばしょうがない。選びの器というのは、あなた方一人ひとり、それだけの使命を、実質と使命を頂いているひとです。

「私みたいなやつが選ばれるか」

なんて、みたいな奴だから選ばれる。人の比較なんかひとつも要らん。

●無限無量性

「天の父はその陽を善き者にも悪しき者にも照らし、その雨を止しき者にも正

しからざる者にも降らせ給う。それだから、天の父のごとく汝らも全かれ」

こんな言葉を、キリストは水を割らずにおっしゃる。これは我々に絶対不可能な言葉です。不可能な言葉をそのまま宣言される。どういう人かと、キリストという霊止は。

善い者も悪い者も、そんな相対的に善いの悪いのなんてのは問題ではない。神さまの恵みは一視同仁で、問題は、その光を受けるか受けないか、それだけのなし。その雨の水を――聖霊は火にも水にも例えられますが――どっちにも与えるんだ。陽を照らしたり、雨を降らしたり。この神の恵み、愛は相対的な世界を突き抜けている。その如く、

「お前たちも全かれ」

という。できますか？ できないんだ。どうしたらいいんですか。

「そういう恵みを実は、私は父から受けているよ」

と、キリストは仰るわけだ。



「この父から受けている私を受けとりなさい。私はお前の光となるよ。お前の水となるよ」

と。サマリヤの女に、

「我を飲め、そうしたらもう渇かないぞ」

と言われたでしょ。だから、その世界が完全性の世界なんです。この全きということは、量的に言っているのではない。

上弦の月は完全性をもった三日月なんです。やがて満月になっていく。いわゆる完全という「全き」という字は、「テロス」「目的」という字でもある。「目的論」のことを「テロロギー」という。完全に「これで全し」というと、終りなる。だから、私は「全き」という言葉はあまり好きでない。では何だというと、「無限無量性」なんです。限りがない。キリストは無限性のひとなんです。福音は無限的なものです。全きものではない。「全き」というと、

「ここは欠けている。ここをもう少しよくして……」

なんて、そんな事をしていて、全きなんてものがあるか。限りなくゆく。人間の作品は、どんな作品であろうと、完全なものはない。ダンテの『神曲』であろうと、ゲーテの『ファウスト』であろうと、ミケランジェロの作品であろうと、全部これは完全なものではない。その作品は、

「無限性を持っているか」

ということが問題なんです。無限性があれば、それがどんな欠けたものでも大丈夫です。滝廉太郎は肺病で若くして死んでしまった。けれども、彼の「荒城の月」は無限性をもった曲だ。いつまでも滅びない。不滅性とか無限性とかいうもの。不滅にして無限なるもの。それは、このキリストの福音なんです。イエス・キリストは無限無量のかたです。私はキリストのことを「大変な霊止^{ひと}」だという。これは大変なかたです。もう圧倒されてしまつて、ありがたくて、言葉では表せない。

●「主さま！アメン！」

だから、

「主さま！」

と、本当に全身で、全身を叫びとし、沈黙の雄叫びとすると、もうそれで、

「アメン！」

なんです。

「アメン！ ハレルヤ！」

で、あと祈ることがない。中世の神秘家、エックハルトかな、これが祈らせると、

「キリストさま！」



とか、何か一言だけ言ってそれで、

「アーメン！」

と言って、他は何も祈らない。アッシジのフランシスも、終りはそうだった。そこにもう、一切の、言葉では表現しきれないものが入ってしまったている。そういうことになったら、楽ではないよ、自由ではない。しょうがない世界、始末の悪い世界です。

福音の神秘の世界は、教会でも召団でもない。あなた方一人びとりが、

「神——キリスト——聖霊——我」

の、この縦の関係が本当に立つか。本当にそこに生きているか。その生命で、本願の^{ごうりき}劫力によって生きているか。現在を永遠として生きているか。それひとつです。

そうしたら、その人は光らざるを得ない、愛せざるを得ない、助けざるを得ない。パウロがそういう人だ。だから、あの百難を突破して、コリント後書11章に書いてあるとおり、彼はなお進んでいった。殉道の死を遂げるまで。とにかく、パウロという人は凄いひとだ。彼が凄いのではない。キリストの力が凄い。聖霊が凄い。本当の証人はパウロです。

「福音は言葉にあらず、力なり」

と、パウロが言った。全くキリストの力です。キリストも神の力です。福音の最大の証者はキリストです。相対を絶つた世界。相対を絶したキリストという、この神の証者を、この福音書のキリストを抜きにして、どこへ行つたつてダメです。

だから、福音書を——旧約ではイザヤ書、新約では福音書——これを破りとして、しよつちゅうポケットやハンドバックに入れて、^{たんどく}耽読してくださいよ、もう暗記するくらいに。そして、自分が福音書になつてしまふ。

「もう聖書はいりません、私の中には福音書が生きています」

ということになる。

「汝らはキリストの書^{ふみ}なり」

と、パウロが言った。我々が活字、活ける文字なんだ。活字とは素晴らしい言葉だ（異言）。私は、召団はもうどうなつてもいいよ。

「しかし、どんな患難に遭おうが、どんな渦の中にあろうが、絶対にキリストからは離れません」

というのが、本当の召団員です。キリストにあつて、我々はお互いに愛せざるを得ません。この相互愛の愛がまた、知らない人たちにどんどん展開して行かざるを得ません。いくら憎まれても、誤解されても、一向差し支えないと。

●奥義の中心は根源愛

ペンテコステで三千人もひっくり返ったくせに、本当にキリストを証したのが、結局、この使徒たちだけです。それは無名の素晴らしい人たちもいたでしょう。いいです。それ



は天の書に記されている。黙示録にあるように、

「天の書に記されたる者」

人の歴史には書かれない。およそジャーナリズムとは違う。そういう、本当に神の歴史の人物に、我々はされていかなければ、一人びとりが。神の国を建設する、天のエルサレムのいろいろな宝石があるが、活ける宝石として、キリストの光が光らざるを得ない。

「汝らは世の光なり」

とは、そのことだ。

「なかなか、光になれません」

ではありませんよ。

「はいっ、あなたが私の中で光っています」

と、はつきり言えなくては。私は、阿蘇でバプテスマを受けた時に、

「私の目から光がこぼれていたろう」

なんて書いた。大自然が美わしくて。帰りの汽車の中で聖書を読んだら、ベールがとれてしまっていた。今まで何を読んでいたかと。それは聖霊の光でなくては、聖書は読めない。

「それでは、私はまだです」

と、そんなことを考える必要はない。日本語でもギリシア語でもヘブライ語でもなかった。その奥から神の根源の言葉が響いてきます。これなんだ、本当の世界は。キリストの言葉は全部暗号です。いわゆる言葉にこだわってはダメだ。

「初めに言あり。^{ことば}言は神と偕にあり。言は神なり」

という。

「あれは言ではダメだ。いや、初めに力があつた。ちよつとまだダメだ。初めに行、^い為があつた。そうだ、行為が本当の言だ」

と、ゲーテが『ファウスト』の中でそれを書いて、

「初めに行為ありき」

と訳した。その行為の源泉は何かというと、「愛」なんです。神さまは愛の源、^{もと}「源愛」である。キリストは、神さまの源愛をいただいた「根源愛」です。だから、

「初めに根、^{もと}源愛ありき」

ということ。

「すべての愛は神からきている。神・キリストからきている」

これが奥義です。奥義の中心のものは愛です。愛なきものは生命でない。本当の生命は愛をもっている。生命の質は何かというと、愛なんです。すべてのものは愛に飢えている。

●十字架と霊現

「けれども私は本当のことをきみたちに告げる。私が去るのはきみたちに益で



ある。私が去らないと助主はきみたちに来ない。私が往ったら、これをきみたちに遣わす。」(ヨハネ16・7私訳)

助け主は、いうまでもなく、聖霊のことです。助け主、慰め主ともいう。

「私が天界に行ったら聖霊がくる。地上ではお前たちに直接に聖霊を渡すわけにいかない。罪の問題をすっかり解決するために、私が十字架に架かる。全部、贖ってしまおう。我執というのを、自己にとらわれているのを、すっかり抜いてやるから。

私が十字架でもって全部それを贖ってやる」

と。十字架の贖いというのはいさういふことだ。ただ罪を赦しただけではない。

「罪を忘れてしまふぞ。もはや、思わない」

と、イザヤ書に書いてある。人間関係では、そんなものは出てこない。だから、この十字架の愛の所にくれば、人間関係の本当の解決は、必ずついている。解決というのは、解決がつかないで解決がつくんです。そういう世界です、理屈ではないから。

「自由」なんていう内容はもの凄い内容です。「クリスチャンの自由」と書いてあるけれども、愛と自由とは離してはいかん。愛のないところには、本当の自由はない。本当の自由は必ず愛をもっている。勝手気儘ではないんだ。今の普通の人の、「自由、自主」なんて、あんなものはいくらでもない。生命も自由も愛も、これはみな同じことを別な表現で言っているだけのことはなしです。

私は「復活」という言葉はあまり好きでない。キリストがまた息を吹き返して復活したと、そうじゃない。イエス・キリストの中にはもう既に霊的な生命が動いていた。肉体は滅びても、必ず霊体として現れてくる。復活ではない。霊現するんです、キリストは。復活祭ではない、霊現祭です。霊的な生命が現ずる。

だから、戸が閉じているのに入って来たでしょ。大変な霊止だ。しかも、お魚を食べたりする。こんなことは、およそ我々の、あるいは科学的知識の及ばない世界です。だから、福音書のキリストは大変な方です。もう、溢れてしょうがない。もう、歌わざるを得ない、喜ばざるを得ない、ありがたくてしょうがない。御利益でも何でもありません。およそ御利益宗教とは違う。病が癒されたら、キリストに行かなければダメです。癒された事をただ感謝したってダメですよ。

「主さま、あなたの生命にいいよ生きます」

と言って、キリストに行く。

あなたの方の中にいろいろ肉体的に、あるいは精神的に、くもりのかかっている方、いや、方はいっぱいいます。そんなのは心配しなくていい。ひとつも心配は要らん。心配くらいバカらしいことはない。



● 弥陀の誓願不思議に

『歎異抄』の、

(第一条) 弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。

その信心も、本願は「南無阿弥陀仏」と祈らせるんです。もちろん、祈りますけれども、本当は、祈らせられていることに気が付くわけです。

そのゆへは、罪悪深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへにと、云々。

十字架はまた、本願以上だから。キリストの十字架・聖霊は、いかなるものもこれを妨げることはできない。いわゆる善悪も問題でない。全部、本当の救いに入れてしまう。(第三条) ……自力の心をひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。

けれども、親鸞はまた別なところで、

「地獄へ往くか、極楽へ往くか、そんなことは知らん。ただ、念仏せざるを得ないだけだ」というようなことも書いてある。

他力をたのみたてまつる悪人、もともと往生の正因なり。とある。

「正しき者を招かんとして来たのではない。罪びとを、困っている者を、弱き者を招かんとして、私は来たのだ」

と、キリストも言っただけの通りです。

「私が十字架を通って天界に行つて、さあ、今度は聖霊がきたら、お前たちは、私の言ったりしたりしたことが全部、飲み込めるぞ」

と、ちゃんと約束しているんだ。その通りなつてしまった。

大いに逆らっていたパウロが、この霊現のキリストにひっくり返された。

「何ぞ、我を迫害するか!」

と。ひっくり返されて、三日三晩、目が見えず、ものが飲食できず。アナニヤに按手されて、

「わが眼より鱗のごときもの落ちたり」

と。そして、パウロは祈った。誰にもはからない。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

と。キリストから直接やつつけられた。

そういう奥義の世界は、「神—キリスト—聖霊—我」の直線の世界です。奥義の主体はイ



エス・キリスト。それを自由に媒介してくださるのは聖霊、キリストの霊です。だから、そこが旧約とは違う。

マグダラのマリヤが――これは私はマグダラのマリヤと誤っているんですが――ナルドの香油を壺にいれて、その壺を壊して、キリストの頭から全身にかけた。もうこれは使いません。キリストは、

「その女のしたことは、福音の伝えられる時に、全世界に伝えられる」

とおっしゃった。あれは、マグダラのマリヤに相違ない、或る女と書いてあるけれども。七つの悪鬼に憑かれたが、それから全部、解放されて、それで、本当にキリストにしがみついて、十字架のキリストにまでしがみついた。

このキリストの愛に、救いの愛に対して、全身をもって彼女はキリストに応えた。葬りの油を注いだ。誰もがキリストに躓いている時に。だから、キリストは非常に喜ばれたわけだ。

●詩「みめ美しく」

第十巻の370頁(10月14日「我も汝を罪せじ」の項)、ヨハネ伝8章1節からのところに、

召団讃歌A2「みめ美しく」

(1979年12月6日作 讃美歌245「おもいずるも」の曲で)

- 1 みめ美しく 純情の
おみな 女を捕え 連れ来たり
パリサイ人ら^{ひと} 学の徒ら
- 2 「師よこの女 曳き出せり
道ならぬ
わがをせし時^{おきて} 捕えけり
律法によれば 石をもて
打つべきなるぞ 如何にせん」
- 3 師は身を屈め^{かが} 地の上に
もの書き給つ 応えせず^{いら}
偽善者どもは いらだちて
返答を求め^{こたえ} 問い迫る
4 師は身を起こし 言い給つ
「汝れらのうちの 潔き者
石を投げて！」 かく言いて
また身を屈め^{また} 書き給つ

石を投げ得るものは投げてみよと。誰もいない。その女を責めた者はみな逃げて行った。



5 この聖言^{みことば}に 胸打たれ

老いも若きも 手の中の

石を落して 次ぎ次ぎに

姿を消せり 罪びとら

6 師は身を起こし 見給えば

女と師のみ 残りたり

「女よ汝^なれを 責むる者

何処^{いずこ}に在りや」 「誰もなし」

7 情け深くも キリストは

彼女^{かれ}に手を按^おぎ 言い給う

「彼女に手を按^おぎ」とは、聖書には書いてない。けれども、キリストは手を置いたに相違ない。

「我も汝れをば 罪せじな

再びすなよ ざや往け！」

8 人の心を 知り給う

主のまなざしは いと深し

審^{さば}きと赦^{ゆる}し あぎやかに

現^{あらわ}し給う 荷^{にな}いつつ

キリストはその女の罪をも全部、自分が荷なつて、

「私もお前を罪しない」

と。十字架の愛をそのままなされたわけです。

「審^{さば}きと赦^{ゆる}し あぎやかに

現^{あらわ}し給う 荷^{にな}いつつ」

これが、罪の審きも受けて、それから罪の贖いをしたのが十字架ですから。

「神さまの聖意を完全に体現したのに、何故、私を十字架におかけになるか」

と、分かっていながら、キリストは最後に神さまにくつてかかった。

「なんぞ、我を棄てたもうか」

と。あの言葉は、神の聖意を現するという義の世界――神の聖意を現することが義なんです。いわゆる正義ではない――これがもし立たないならば、世界はひっくり返る。そういう叫びですよ、あの「なんぞ我を棄てたまいし」は。

「この義の関係を、あなたの聖意を行っている私を、

天意が、聖意が、神の意志が成ることが天国なんだから、

天国を現じていた私を、なぜ十字架にかけなさるか」

ということ。

「それは、お前の義を、その聖意を現じた天国的な現実を人にやるためだ」



と。それが贖いですから、罪の赦しというのは。だから、

「彼らを赦してやってください」

と、あの叫びのあとでキリストが言われた。「なんぞ我を棄てたまひし」というのと、「彼らを赦せ」というのは矛盾しているのではない。この構造が本当の構造なんです。これも一つの奥義の世界です。(独唱)

「人の心を 知り給う

主のまなざしは いと深し

審きと赦し さば ゆる あざやかに

現わし給う に 荷いつつ

これは十字架のこと、キリストの十字架の気持です。普段歌わない讃美歌ですけれども。

●『ドイツ神学』

この福音の奥義というのは決して概念的に規定できる世界ではない。ダイスマン(アドルフ・ダイスマン)がパウロの信仰を「クリストウス・ミステイク」「キリスト神秘」と言いました。ダイスマンの『パウロス』という本は素晴らしい名著です。中世の神秘家はややもすると、キリストから抜けている。アッシジのフランシスは抜けていません。

エックハルトが多少抜けているところがある。それで異端視されたんだけど。エックハルト、タウラー、ゾイゼと三人います。エックハルトは非常に優れた知的な人間です。タウラーというのは非常に行為的です。ゾイゼというのは非常に情的だ。知・意・情の三人が神秘家に不思議にいる。しかし、ややもすると、キリスト抜きになる。

ルターが発見した『テオロギア・ゲルマニカ』『ドイツ神学』という本がある。フランクフルトの人間が書いたので『フランクフルター』という名前もある。ルターがこれを読んで、「自分は聖書、アウグスチヌス、その次はこの『ドイツ神学』から非常に影響を受けた」と言った。『ドイツ神学』の中では、

「我執を抜ける、そして本当に神と直結する」

という、内面的な深さを言っている。もちろん、その中にはキリストも出ていますが。

「人間はいかなるものにも、霊においても、自然においても、自己のものを求めてはならぬ。ただ、神の栄光を求めべきこと。また、人間は、正しき門、即ちキリストを通して永遠の生命の中に入るべきこと」

と、終りの方に書いてある。ルターはこれを読んで驚いた。よく、これを見つけたものだ。ルターが読むようにできていたんだ。

とにかく、福音書のキリストに帰らないものはみな危ない。十字架をいい加減にしたり、聖霊をいい加減にしているようなのは、どっちもダメだ。観念になったり、とんでもない



霊的傲慢になったり。十字架をいい加減にするのは、これは正直、異端だ。

「真理の歴史は異端の歴史」

という別な言葉もある。というのは、いわゆる正統とされているものが実は形式化されて、生命がなくなっている。それに対して、

「そうじゃないんだ」

と言って本当の世界を表したのが、実は異端とされた。マルティン・ルターが、カトリックに対しては、カトリックの中の人なんだけれども、それから異端にされた。アッシジのフランシスも始めは異端視された。本当のことを言うと、何のかんと言われる、それから相手にされない。

皆さん、一人ひとり、大事な使命を荷なっていますから、遠慮なしに、言葉であろうと、行為であろうと、何でもいいです。限りなく進んで行きましょう。無限性、不滅性が大事なんです。いわゆる全さは要らん。

「全かれ」

という言葉はむしろ、

「お前たちは無限であれ。父の如く無限であれ」

ということです。

●十字架の聖ヨハネの『暗夜』

おもしろい詩を紹介しましょう。「十字架の聖ヨハネ」というひと。この人は1542年から1591年、丁度ルターが亡くなる頃、49歳で仆れた。これはちよつと驚くべき詩です。『霊の暗夜』(Noche Oscura des Alma) という標題の詩です。それが英訳されたのがある。

「1. 暗い夜に、悩ましき愛に燃やされた。何とこれは幸いな運命か。誰にも気付かれないで自分が行った。自分の家は今、安らっている。

「悩ましい愛に燃えて」の悩ましいというのは、神さまに対して何とかして神さまを愛さないではいられなくて、その神への愛に自分は燃やされていること。

2. 暗闇でもって、しかも安らっている。それは神秘的な階段によつて安らけく進んでいく、登っていく。変装して、姿を変えて。何とありがたい、うれしい運命であるか。

闇の中で、しかも深く隠されて。私の家は今、安らっている。

これは、どういう時に書いている詩かというと、実は牢獄の中なんです。異端とされて、牢獄に入れられてしまった。そして、昼間でもほとんど光がない。ご飯のときだけ、ちよつと外に出る。だから、24時間、暗夜なんだ。大変なことだ。その中で、

「暗闇で何も見えないと、神さまだけが見えてきた」

というわけだ。神さまに対する愛は、この暗闇でこそ本当に私に与えられて、そして、光ってくる。この「霊の暗夜」というのはそういうことなんだ。普通は夜というのは、何か



悪の環境みたいに思うけれども。「いや、この闇の世界がいかに素晴らしいか、闇の光というものが。闇は実は昼間よりか明るい。神さまに会うには闇に限る」というようなことになってしまった。

3. このうれしい夜に、誰にも見られずに、秘密に、自分自身をも見ないで。私のところの中で燃えているところのものを除いては、いかなる他の光、あるいは導きをも必要としないで。

「私のところの中で燃えているところのもの」とは神さまの愛だ。神の愛に燃えてしまって、夜がうれしくてしょうがない。牢屋の中にいて、「牢屋こそは本当の神さまと接する所だ」と。

4. 昼間の太陽よりもっとはつきりと、私をその闇に現れた神さまの光が導いてくれた。神さまが私を待っていていらつしやったところのその所へと導いてくださいます。

天界に自分は連れて行かれたと。完全に勝利だ。

その所で、神さまを私はよく知った。そして、そこには誰も現れてこない。神さまと私だけだ。

5番は雅歌書の言葉をここに思い出して書いてある。中世の神秘家は雅歌書を非常にキリストとの愛と、アナログア（アナロジー、類推、類比）に読んでいる。クレルボーのベルナルというのも、雅歌書を非常に愛読した。修道院の人たちが本当にキリストと魂が交わるのは、そういうわけです。修道院というのは、非常に聖書を学んで、ある意味では、文化の中心だった。

5. ^{あかつき} 暁よりもっと愛すべき夜よ、導いてくれるところの夜よ、恋人と愛せられる者と一つにしてくれたところの夜よ、神と自分と一つにしてくれた。

これは雅歌書のシュラミの女と牧人の愛のところ。

彼女の愛人の中へとくりいれて変えてくれた。

恋人同士が一つとなっているような世界です。

私は神の愛にこのようにして一つとされてしまった。夜がそうしてくれた。ありがたい夜だ。

牢屋がかえって天国になってしまったと。

6. おお、私の花咲くところの胸よ。

自分の胸が神さまのしとねである、という気持なんです。

これは全く神さまのためにとおきの胸であった。

自分の胸に神さまを迎えて、この神さまの愛で私は満たされてしょうがないと。

そこで、彼は自分の胸の中で憩ってくださって、休んでくださって、しかも神さまは眠ってくれた。

これはもう、愛人同士の雅歌書の境地を神さまのことに例えて言った。

彼に抱きつきました。しがみつきました。香柏のそよぎが、神さまに扇でもって風を



送っていました。神さま、私の胸でゆっくり休んでください。

こんなことを言うやつはちよつとないね。

7. 神さまの頭髮がそよ風の中でゆらゆらと揺らめいている。そのそよ風は城の塔の所から吹いてきた。

ということは牢屋の塔のことです。

そして、優しい手でもって私の首を叩いてくださった。あらゆる情動が私から去りました。この世的な情動は全部去って、神さまとの愛の交わりだけになってしまった。

中世の神秘家らしいね。

8. 私は自分を忘れたその世界に、己を忘れたような世界に居続けている。私の頭は私の愛人の中にやすらっていました。あらゆるもの、また自分自身からも抜けていってしまった。

自分をも失い、あらゆるものを失って、在るものは神さまだけだと。

そして、百合の中でもって忘れてしまった。忘れて、私のいろんな心配も全部投げ捨ててしまった。」

そういう天国的境地に私は牢屋の夜の中でもって神さまと一つとなりましたと。

これが、「十字架のヨハネ」といわれる人の――まだ幾つも詩を書いたらしいですが――この詩が特に有名な詩らしい。

この静かな夜が、禍害わざわいの夜でなくて、祝福の夜として、非常に幽玄な境地に入ったわけだ。本当の深みが、深みの世界が必要なんです。ザワザワしている世界はダメだ。我々の信交は深さ持っていないとダメです。その深さが爆発すると、もの凄い激しさになる。深さと激しさが矛盾しない。深みを失ったらいかんです。その一つの象徴として、この詩をご紹介します。

●大祭司の祈

ヨハネ伝の17章、第十巻の393頁(10月28日「大祭司の祈」の項)に、

「イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言ひ給ふ「父よ、時来たれり、……¹¹我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の御名の中に彼らを守り給へ。これ我等の如く、彼らの一つとならんためなり。……¹⁸汝我を世に遣はし給ひし如く、我も彼らを世に遣はせり。……²¹父よ、汝我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。」

居るといふのは、一つとなつていふということ。「神・キリスト・我々」です。「彼ら」は私たちは二人称で「汝ら」と読んだ方がいい。

²²我は汝の我に賜ひし栄光を彼らに与へたり。これ我らの一つなる如く、彼らも一つとならんためなり。²³即ち我彼らに居り、汝我に在まし、彼ら一つ



となりて全くせられん為なり。」(ヨハネ17:1～23)

素晴らしい言葉です。これが本当の天国だ。神と自分(キリスト)と彼らと一つとなる。その為にはどうしても聖霊がそこないと一つになれない。だから、

「去るのは益なり。助け主が来たら、この17章の預言が成就する」

と、こういうわけです。我々において、成就しつつあるわけです。「これでいい」なんていう世界でない。「神・キリスト・聖霊」の神秘の深さというものは、その無限性というものは、限らない。「全うせられた」なんて、それでおしまいとなったら困る。この「全き」という字はちよつと躓きになる言葉だ。

「全し。これで満足しました。お終い」

なんて、そしたら後もどりするよ。限りなく前進しなくては。

「いと広し」という。パウロが言っている通り、

「およそ正しいこと、およそ美わしいこと、何でもそれは認めていく」

と。パウロは本当の良識のある人です。もの凄い信交の深さと同時に、いわゆる常識以上の良識を持っている。パウロは良識の人です。我々は、

「やつぱり、あの人たちは凄いな。しかも、本当に楽に交われるな」

といわれる。それは、何も心配要らん。考える必要はない。本当の世界に入ると、そういった非常に自由自在な広さと、深さと高さが、おのずから展開してきます。これは全部、キリストです。キリストから来る。

それからまた、聖霊は本当に見分けがつく、間違つたものやインチキなものとの。白きサタンがいるから。御霊ではちゃんと判断がつく。その判断がつかなくなったらしょうがない。何とも説明ができない。私はもう仕方がない、最後に詩の世界でそれをやりますから。教育論も大いにやってやる。冗談じゃない、この日本の教育は。

そういうことで、皆さん一人びとりは——落ちこぼれなんてものはひとつもない——天下一品の使命を持った、キリストに属するものです。

「御霊なき者は、キリスト者にあらず」

と、パウロが言つた。福音書とパウロの書簡はよく読んでください。とにかく、パウロは友達だからね。先輩、友達。ありがとうございますと。

私の話は、終りはない。終り無きはなし。では、終り無き話を終わります。

● 感話懇親会

ありがとうございました。

伝道には——決まつたやり方はひとつもない——いろいろな在り方があるので、どうぞ、

「生くることは即ち証しすること。証しは即ち伝道なり」

ということ、私たちのあいだには、いわゆる律法はひとつもないですから、そういった



生き方で行きましょう。

昨日、今日と、私自身も、

「わが酒杯は溢るるなり」

で、語るも聞くも同じこと、このキリストの中に入れられて、本当に万歳です。

これは不思議なもので、私の宝ですが、何十年前前の京都集会の三光会館で、3、4人で祈った時に、U君が異言で祈った。

「U君、その異言は凄いから、それをちよつと書いてくれないか」

と。そうしたら、これは何語でもない、文字の形からいうと、アラビア文字に似ているけれども。

「これを日本語に訳してくれ」

と。そしたら、訳してくれた。それを、今、読みます。

「主は言われる。主に在りて喜べ。主に在りて悲しめ。主の御意をのみ為しなさい。主と共にあれ。世界は滅びる。世界は滅びる。悔い改めよ。主にもどれ。主にもどれ。戦さが始まる。すべての人々はみんな死ぬ。地球は破滅する。全人類に未来はない。ただ一つの希望は、今すぐ主に帰るしかない。今という、今じゃ、今じゃ。伝えよ、主を伝えよ、主を。選り召されし者よ、祈れ。主に用いられんことを、祈りなさい。主は人類を愛される。愛するが故に、審かれるのじゃ。人類は、みずから破滅への道をたどる、自ら。よいか、直ちに、戻りなさい。直ちに、直ちに。兄弟よ。主にある兄弟よ。主の悲しみを知れ。主の悲しみを知ってくれ。よいか。涙を知ってくれ。もはや我れ生くるにあらず。よいか。主の涙を知ってください。いいですか。直ちに主にありて用いられんことを。直ちに。祈ってください。――主の僕パウロ。」

そういう異言です。U君はこれを走り書きした。そして、これをまた日本語にちゃんと訳した。

十二召団が、十一になり、今度は十になってしまった。幾つになってもいいが。我々、数の分らない召団。どうでもいいんだ。

ルターがヴォルムスに向かう時に、

「たとえ屋根の瓦の数ほどのサタンがいても、私は行く！」

と言った。このキリストの僕ルターは、このように戦いの器でした。深い愛はもの凄い戦いの精神を持っている。十字架にかかったキリストは最大の勇者なんです。キリストの霊に勝つものはひとつもない。

崩れるやつはくずれていけ。しかし、我々は、遺れる民として、神の国を継ぐ。いいですか。それだけの気持をもって、私は進んで行きます。

たち戻るときには、無条件に入れます。片一方の十字架の盗賊が散々悪い事をしたが最後に立ち帰った。キリストは、



「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言った。もう片一方の傲慢なやつは地獄に落ちていった。平伏するか、逆らうか、この二つしかない。

私たちは本当にキリストに平伏し、キリストと一つにされ、それから、本当の涙をもっている。非常な憤激と共に、非常な悲痛を持っている。けれども、本当の光が貫いています。

召団讃歌A49 「主さまあなたは」

(1988年8月3日作 讃美歌48 「しずききゆうべの」の曲で)

1 十字架・聖霊の みたま 主さま あなたは

我れを救ひて 戦はせ給ふ

2 主さま あなたは わが御光よ！

我れをつらぬき かがやきたまへ

3 主さま あなたは わが肉の霊肉 にく

あなたを喰ひ 永遠にぞ生きん とわ

4 主さま あなたは わが骨の霊骨 ほね

わが脊椎に 聖手 みて 按きたまへ

5 主さま あなたは わが血の血なり

天の生命 いのちを ひとにわかたん

6 主さま あなたは 愛の愛なり

この愛をもて ひとを助けん

7 主さま あなたは 歌の詩歌 うたなり

生涯 いのちの限り 聖名 みなを讃へん！

8 主さま あなたは わが身のすべて

あなたと一如 ひとつ アーメン ハレルヤ

これで、お分かれいたしますけれども、祈りの世界では、本当に助けながら、また、聖名を賛美しながら、進んでいきましょう。

この日本のキリスト召団を破るものは一つもない！それだけの歴史的な使命をもっています。おわります

